

# ヴィーヘルトの転機・1934年6月

竹 村 恭一郎

Wiecherts Wendepunkt im Juni 1934

TAKEMURA Kyoichiro

## はじめに

作家エルンスト・ヴィーヘルト (Ernst Wiechert, 1887-1950) の人間、作品について考えようとする者は主として、彼の経歴、時代への考察、個々の作品に関する自己評価および執筆の動機等を、自伝『歳月と時代』(Jahre und Zeiten, 1949) に求めてきたといえるだろう。ケーニヒスベルク大学に入学した18歳から、二つの世界大戦を経験したドイツの激動期を生き抜き、スイス・チューリッヒ湖畔の住居に落ち着く61歳までの自らの歩みを回想するこの作品は確かに時代の貴重な証言たりうるものである。しかし、それを認めた上で、この自伝に記された言葉をすべて鵜呑みにし、論拠として挙げるのは少々危険だとも私は考えている。とりわけ、ナチス政権下のドイツにおいてこの作家がどんなことを考えていたのかと探ろうとする者は、慎重にその言葉に接する必要があるだろう。というのも、年の誤記<sup>1)</sup>はもとより、自分に都合の悪いことについては、意図的に触れていない、さらに言えば隠蔽しているふしも見受けられるからである。

本稿では極力、ギド・ライナー (Guido Reiner) の労作 “Ernst-Wiechert-Bibliographie” (全4巻) によって紹介された客観資料に基づき、『歳月と時代』においてほとんど言及されていない、ヴィーヘルトがナチス体制の維持に協力したと見られても仕方のない行動をとり、発言をおこなっている一時期を含む約2年間、厳密に言えば1933年3月3日から1935年4月16日までの講演活動を中心に、彼の現実行動にあらわれる時代認識を検証し考察を加え、従来の作家像を洗い直せればと思っている。

## I

ヴィーヘルトがヒトラー政権誕生後初めて演壇に立ったのは1933年3月3日、場所はミュンヘン大学である。さして話題にもならない小説を細々と発表していた雌伏の時期を経

て、3つの文学賞を立て続けに受賞し<sup>2)</sup>、ようやく彼は世間の注目を集めはじめていた。そして、文学についての質疑応答もなく、くつろいだ調子で行われたこの講演会は大成功を収めた。そのことは15日後、学生たちからの要請を受けて、同じ場所、同じテーマで講演が再度おこなわれていることから窺えよう。

テーマは「単純な生活と創作から」(Aus einem einfachen Leben und Werk)。のちのヴィーヒェルトのベストセラー小説『単純な生活』(Das einfache Leben, 1939)のタイトルとの類似に興味がそそられるが、当時の記事によるとその講演は、自らの作家としての歩み、初期の作品に対するネガティブな自己評価、近年発表された作品執筆の意図の紹介、そして自作の朗読でしめくられた。その中で注目すべきは、第1回ラーベ賞(Raabe-Preis)受賞作でありヴィーヒェルトの出世作ともなった『ユルゲン・ドスコチルの女中』(Die Magd des Jürgen Doskocil, 1932)について語ったこんな一節である。

どんな人間にも訴えるものがある本というのは、基本的なもの、もっとも単純なものへと立ちかえっている一畑とパン、労働と責任へと<sup>3)</sup>。

ギド・ライナーはここに「当時この作家がまだ独裁政権の敵対者と数えられてはいなかった<sup>4)</sup>」証左をみている。またヴィーヒェルト自身も、「たぶん『ユルゲン・ドスコチルの女中』を書いた者は自分らの陣営にも属する者に違いないとナチスは信じていたのであろう<sup>5)</sup>」と振り返っている通り、自然の中での生活にこそ高貴な人間性の発現と成長があるという考え方が窺える彼の作品に、ナチスはその芸術観の「土」の部分で相通じるものをみていたわけである。

しかしながら7月6日、ミュンヘン大学講堂で行われた『詩人と青年』(Der Dichter und die Jugend)と題された講演においてヴィーヒェルトは「新たな精神とは相容れない<sup>6)</sup>」ことを表明する。ここで彼は主に自己の詩人観ならびに詩人の使命について語っているが、彼の考える「詩人」とは、「さまざまな混乱と不安に満ちた世界にあって、大いなる秩序のより糸をほぐしたり結びつけたり、濁ったものを澄ませ、もつれたものを単純に、苦痛を神聖なものにする<sup>7)</sup>」使命を負っており、「詩人が民族の不朽のものの中へ入り込むと、詩人の声はかならず若者に聞きとられ、若者の心の中に詩人の炎が燃え上がる<sup>8)</sup>」という。そして「物静かに警告を発する者」としての「詩人」の使命を強調する。つまりどんな世の中になっても変わらぬ「不朽のもの」の価値を伝える詩人の声を鋭くとらえる若者にも、その使命を担って欲しいとヴィーヒェルトは訴えているのである。

この講演は一見何も問題がないようにも思える。しかしヴィーヒェルトが、彼の考える「詩人」として、ヘルダーリン、ニーチェ、シュテファン・ゲオルゲの名を挙げ、次のように言葉を続けると、この講演が単に近頃名の売れてきた作家の、熱っぽい文学観の披瀝にのみとどまるものではないことが明らかになってくる。

われわれは、この時代の詩人、と自ら称する人間にこと欠いてはおりません。時流の波に持ち上げられたその種の詩人は、その波に再び葬られる前に、時流の波の高みからあなたがたに口やかましくべらべらとものを言うのです。しかし不安に満ちた自己の心情を口にする、本当に勇気ある詩人にはめったにお目にかかれません。皆さん、私たちが今生きている時代の中、さかんに勝利者の凱歌があがっています。そして、その歓喜の声に対して何も言うことはできません。なぜならそれは勝利者の凱歌だからです。しかし、忘れないで下さい。若者が裁判官の席にすわられ、生活と日々の営みに死刑を言い渡さなければならない時代というものは、その中であって、若者だけでなく多くの人びともまた、苦しめられるということ<sup>9)</sup>。

学生たちは、暗に示されたナチス批判と、その体制にくみしないよう呼びかける「勇気ある詩人」の訴えに盛大な拍手でこたえた。しかしナチスは青年層に多大な影響力を持つこの作家を即座に逮捕する挙には出なかった。また、ヴィーヒェルト自身も根っから闘争的な性格を持ちあわせてはいなかった。それゆえ、ことさら当局を刺激する行動をとり続けはしなかったのである。

## II

ところが、『詩人と青年』の講演以降ヴィーヒェルトが、当局の注意を喚起する批判どころか、ナチス体制の維持に協力したと見なされかねない発言をおこなっていることに私たちは驚かされる。これらの発言が彼の後世の評価に翳を落とすことになっているのだが、その一例が1933年8月18日に催された、ハンブルク大学夏期コースに参加した外国人学生を前にしての朗読会である。

新聞記事<sup>10)</sup>によれば、ヴィーヒェルトはここで自らの幼年時代の回想と自作の朗読をおこなっているが、聴き手が聴き手だけにこの会は「ドイツ人はもともと平和を愛する人びとであることを証す手段として利用された<sup>11)</sup>」ともいえる。作家の意図が、人間にとって普遍的な幼年期の重要性を訴えることにあったとしても、結果として、誕生したばかりのナチスドイツに対して不安など抱く必要はないという印象を外国人学生たちに与えたことは想像に難くない。「生活と日々の営みに死刑を言い渡さなければならない時代」の到来を予見しながら、ただ自己の幼年時代の思い出を語るヴィーヒェルトはまったく自分の立場の重要性を認識していなかった。

その極めつけといえるのが、同年12月のデンマーク、ノルウェーでの発言である。6日にコペンハーゲン、11日にオスロと両国の首都でおこなわれた講演は大きな反響を巻き起こし、ことに6日の講演のことを報じているデンマークの新聞の一紙は、「ドイツはその内的精神の奥底まで平和的である<sup>12)</sup>」というヴィーヒェルトの言葉を見出しに掲げ、この「現代ドイツの最も重要な作家のひとり<sup>13)</sup>」へのインタビューを掲載している。

この時期、10月に国際連盟およびジュネーヴ軍縮会議を脱退し再軍備を宣言したドイツに

周辺諸国は戦争の危惧を抱いていた。そのため、このインタビューの中心的話題は「戦争」である。しかしヴィーヘルトはドイツが再度戦争をおこす可能性を、「戦争、そしてそのすべての想像もできないほどの恐ろしさを忌み嫌う感情は私たちの本質の一部となっています。それゆえ現実には戦争のなんたるかを体験した者はひとりとして新たな血なまぐさい対決に参加しようとは想像だにしないでしょ」と否定したあと、諸外国のドイツに対する憂慮を「それは誤りで偏った考え」と断じ、将来の展望を問うインタビュアーに対して次のように答えるのである。

もちろん私は、ドイツがよりよき時代を迎えていると確信しています。すでに改善は進展している最中です。これについては疑う余地がありません<sup>14)</sup>。

「今日から見ればおめでたい (naiv) といった印象を与える評価<sup>15)</sup>」どころではない。これがごく一般のドイツ人の発言ならば新聞に取り上げられることもないだろう。しかしながらヴィーヘルトはその存在が「ドイツ人たちに榮譽をもたらしている<sup>16)</sup>」とまで紹介された作家であり、いわば「新生ドイツ」の文化の代表者である。自分の発言とふるまいに北欧の人びとのドイツ観を左右するくらいの社会的責任が付随しているということを、ヴィーヘルトはどのくらい意識していたのだろうか。

その他、デンマークの4紙がヴィーヘルトの講演のことを報じ、その記事の内容はことごとく好意的である。危険視されていた「新生ドイツ」から来た作家の講演とインタビュー記事はナチスドイツへの不安を和らげることに一役も二役も買った。そしてドイツ国内においてもこの北欧講演旅行については高い評価が与えられた。年が明けて1934年1月16日、ヴィーヘルトはマールブルク文化連盟 (der Marburger Kulturbund) の招きを受け朗読会をおこなったが、Oberhessische Presseはその前日の15日にデンマーク各紙の好意的な論評を引き、この講演旅行の意義を次のように強調している。

国外で根無し草となり、ドイツ精神の代表者としていい気になっている三文文士たち (Skribenten) が純粋なドイツ的本質を罵倒し汚している今だからこそ、エルンスト・ヴィーヘルトがおこなったように、ドイツの文化的生活の指導的立場にいる者が諸外国で発言し、新生ドイツのためにその例証を示すことがまさに今必要なのである。すべての文化的国家の理解ある人びとは彼らの言葉に信頼を寄せることだろう。そして世界は必ず、ゆっくりと私たちの大いなる意志を理解することを覚え、私たちに対する今までの評価が悪意に満ちた歪曲に基づいていることを認識するだろう<sup>17)</sup>。

トーマス・マンをはじめとする亡命作家たちのナチス批判に対抗する策としてヴィーヘルトの講演は充分に利用され、その目的は大成功のうちに達せられた。結果としてヴィーヘルトは「御用作家」として充分過ぎるくらい「新生ドイツ」に協力したことになったわけであり、その結果、今日にいたるまでこの作家に「評価が定まっていない<sup>18)</sup>」(umstritten) とい

う形容がつきまとうことになるのである。

### III

1933年当時のヴィーヘルトが、自らの講演旅行がナチスの対外プロパガンダに大いに寄与する結果になったことについてどれだけの自覚があったのか、そのことが窺える客観資料は残っていない。私見を述べさせていただくと、この時期のヴィーヘルトは自分の言葉の持つ影響力を過大評価していたのではないか。作品は広く一般に受け入れられるようになり、演壇に立てば絶大な拍手で迎えられる。「不朽のもの」の価値を伝える「詩人」としての自分の主張が聴衆を動かし、いつか必ず実現すると本気で思い込んでいたのではないだろうか。そう考えれば、その是非はともかくとして、国内ではナチスに対する警戒を呼びかけ、国外では（自分が聴衆に新体制の危険性を訴えたから）良い方向へむかうだろうと発言したのも納得できるように私には思える。

決してこれは突飛な推論ではない。というのもヴィーヘルトがとりわけ若い世代からの熱狂的な支持を受けていたからであり、教師という立場にあった22年間も彼は常に教え子から慕われる存在であった。第一次世界大戦の勃発と終結、帝国の瓦解とヴァイマル共和国の成立、巨額の賠償金支払い義務が引き起こした未曾有のインフレ、世界恐慌による失業者の増大、そしてナチスの台頭と政権獲得。こういった社会的安定とはほど遠い激動期にあって、教師ヴィーヘルトは生徒たちに保守すべきごく素朴な人道主義の価値を説き続け、その真摯な姿勢とあいまって彼らから絶対的な信頼を寄せられていたという事実がある<sup>19)</sup>。そして教壇を離れてからも、「教育者」としての使命は「詩人」の使命と形を変え生き続けた。講演のみならず、その作品も「教育者的傾向によって特徴づけられている<sup>20)</sup>」という見解が生まれてくるのもうなずけよう。さらにいうならば、第二次世界大戦が第三帝国の崩壊と共に終わって約半年後の1945年11月11日、ヴィーヘルトは『ドイツの若者たちへ』(An die deutsche Jugend)と題された講演をおこなったが、若者たちはナチス政権下のドイツにとどまり、「長い間、はっきりとした形で、邪悪な世界からの文学的逃げ道として内面への逃避を提示してきた<sup>21)</sup>」この作家の、保守すべきものの価値を説く従来通りの主張をもはや全面的に受け入れはしなかった。そして糾弾の声の高まりの中、失意のうちに1948年3月にヴィーヘルトはスイスへ亡命<sup>22)</sup>する。その決断を促したもののひとつは、自分の声に耳を傾けてくれる者が急激に減っていったことであろう。「教育者」は、教え子がいなければその存在価値は否定されたも同然であり、「教育者」としての自負が強ければ強いほど、失望はさらに深さを増す。

一時期強制収容所に送られるといった悲惨な体験<sup>23)</sup>をしながらもナチス政権下のドイツに踏みとどまり、戦後このような形で母国を去った、一見奇妙とも思えるヴィーヘルトの行動を私はこう解するのである。

さて、自己の影響力を過信していたのと同時に、ヴィーヘルトはナチスの危険性を過少に見積もっていたのではないかと私には思われてならない。この時点では、ナチスに警戒はしながらもまだヴィーヘルトは楽観的であったといえる。

ここで1934年6月下旬から7月初めにかけて、当局ととり交わされた興味深い手紙のやりとりを紹介したい<sup>24)</sup>。はじめは6月20日に書かれたオーバーバイエルンのヒトラーユーゲント指導部からの手紙で、6000人の若者たちを前に話をして欲しいと要請を受けたヴィーヘルトは、25日にその申し出を受けるか否か決める前に、自作を朗読するのか、テーマは、6000人を前に話すのにどんな技術上の工夫が可能なのか、会場はどこかといった問い合わせを書き送っている。作家はこの時点では受諾か拒絶かの態度表明はしていない。指導部は27日に回答を寄せているが、これに対して作家は7月1日付の返事ではっきりと拒絶の意を表明した。

この返信の一部を引用する。なお、文中の「憎悪から出来上がった書」とは旧作『死の狼』(Der Totenwolf, 1924)のことである。すべて自己中心的姿勢から生まれた欠陥だらけの作品とのちにヴィーヘルトが振り返っている<sup>25)</sup> 初期の作品のひとつで、指導部はこの小説の朗読を要請してきたらしい。

自意識の高揚を早い時期から煽ることによって、今日のように若者たちが危険に晒されている時代はかつて一度もありませんでした。彼らに、私が何年もかかって克服した憎悪、そんな憎悪から出来上がった書を朗読することに対して私は責任を負うことはできません。そしておそらく愛や畏敬の念への促しを受け入れるには、集められる若者たちの年齢、立場といった外的条件はあまりふさわしいものではないでしょう<sup>26)</sup>。

にべもない拒絶の言葉は、この時点でのヴィーヘルトの、当局への距離を置いた接し方を証すものとして注目に値する。作家は明確にナチス体制への加担を拒否している。だがそれにしても「ただでは済まされないといった物言いがなされている<sup>27)</sup>」とギド・ライナーによって評されたこの語気の強さはどこに発しているのか。ただ過去の駄作を朗読してくれと頼まれたからだと考えるだけでは釈然としないものが残る。そこでヴィーヘルトのこの決然とした言葉の裏にあるものに思いをめぐらし、これら2通の手紙が書かれた6月25日と7月1日の間に、作家の心境の変化を引き起こしたなんらかの外的要因があるかと考えてみると、6月30日、ナチスの残虐性が怖ろしい形で露見した事件が発生していることに誰しも思いあたるはずである。

1934年6月30日、レーム事件。別名「帝国の虐殺週間<sup>28)</sup>」(Reichsmordwoche)。

その翌日、拒絶の返事をしたためている作家の脳裏をよぎっていたのは、血なまぐさい虐殺に手を汚しているナチス親衛隊の若者たちの姿だったかもしれない。

## IV

幕僚長エルンスト・レーム (Ernst Röhm) をはじめとするナチス突撃隊 (SA) 最高指導部の人間たち、そしてナチスの政敵が多数殺害された「レーム事件」。77名という公式発表以上の犠牲者を出したこの肅清によりナチス内外の不満分子は一掃され、ヒトラー独裁体制は確立したといえる。だが、この詳しい実情は一般の知るところにはならなかった。

ヴィーヒェルトがこの蛮行のことをどこから知ったのかはわからない。しかしながら、すでに3回講演をおこなったミュンヘン大学の学生寮寮長が30日に殺されたという記述が自伝『歳月と時代』に見出される<sup>29)</sup>。ヴィーヒェルトとつながりがあったミュンヘン大学の学生たちから「血の肅清」の報がもたらされたと考えるのは十分可能だろう。いずれにせよ、この事件がヴィーヒェルトのナチス観を決定づけたことは間違いない。しかし体制側はこの作家の動静にさほど注意を払っていなかったことは、北欧講演旅行以降も彼が比較的自由にスイス、スウェーデン、フランスなど外国へ出かけていることから察せられる<sup>30)</sup>。が、レーム事件以降ヴィーヒェルトが国内の公の場で発言した記録は1934年後半には残っていない。年が明けて35年も、当時国際連盟管理下にあったダンチヒで2月に朗読をおこなったことが彼の友人に宛てた手紙<sup>31)</sup> から確認できるだけである。

だが、これとほぼ同時期にナチス文化院 (NS-Kultergemeinde) の芸術愛好サークル (Kunstring) は1935年夏学期の間ミュンヘン大学でおこなう連続講演の企画を立て、2月8日にはMünchener Zeitungに告知を載せているが、その講演者リストにはヴィーヒェルトの名前がある<sup>32)</sup>。注目すべきは、新聞に告知が出る3日前の2月5日に文化院内部でヴィーヒェルトの「世界観的、ならびに人間的態度」についての照会がなされていることであり<sup>33)</sup>、当局がこの作家に全幅の信頼を寄せていなかったことがわかる。再び『詩人と青年』の時と同じように体制批判を口にしまいか。かすかな不安がナチスの側に存在していたことについては疑問の余地はない。

一方、要請を受けたヴィーヒェルトは、2月22日にはその構想をすでに練り上げ、講演の9日前の4月7日に原稿を完成させている<sup>34)</sup>。結び近くには次のような訴えが書きつけられていた。

良心が皆さんに発言するよう命じるときは、沈黙へといざなわれぬよう、今日私はあなたがたに重ねてお願いいたします。そして決して、「この世の中でびくついている」と言われるような、あまたの人間のひとりになってしまわないように。なぜなら、臆病ほど人と国民の髓をむしばむものはないからです<sup>35)</sup>。

1935年4月16日、講演『詩人とその時代』(Der Dichter und seine Zeit)。聴衆に熱狂的に受け入れられ、体制側からはすみやかにその内容の公表および出版の禁止措置がとられたこの講演は、一学生の速記録により若者たちの間に広く伝えられた。のちに、モスクワに本拠

を置いていた反ファシズム文学雑誌『Das Wort』編集部に持ち込まれたこの速記録が1937年4・5月合併号に掲載され、「ドイツ国内の幾十万という沈黙する、しかし憂慮をもった人びとに代わって語られた良心の声」として「ドイツを愛するすべての人への貴重な贈り物<sup>36)</sup>」と紹介されたこの訴えは、どんなに厳しい追及者であってもエルンスト・ヴィーヒェルトに「ナチス協力者」のレッテルを貼ることをためらわせ、「国内亡命」(innere Emigration)という概念のもと、文学史にかろうじてこの作家の名をとどめるのに寄与した講演といっても言い過ぎではないだろう。

このような物言いでヴィーヒェルトは、暗示的ではあるものの、自らがナチス体制にくみする者ではないことを公言したのである。

最後に触れておきたいことがある。前に引いた聴衆へのアピールに関してだが、複数の論考に引用されている上の一節はナチス批判としてのみ漠然と受け取られ、それ以上の言及はなされていなかったように思われる。だが、ここで使われている「臆病」(Feigheit)という言葉に注目したとき、思い出されるのは『歳月と時代』の中でレーム事件に触れているくだりである。

私たちは共に身震いしながら1934年6月30日を体験していた。その血なまぐさい暴力のために身が震えるような思いをしたというだけではない。周囲に認められた恥ずべき臆病さにぞっとしたのだった。まわりにいた者たちが、自分たちも人知れずこの「帝国の虐殺週間」の折に殺されてしまうかもしれないと考えていたとしても<sup>37)</sup>。

レーム事件の衝撃は、ヴィーヒェルトの楽観的に過ぎるナチス観を決定的に変えた。それゆえ、ナチスの暴力的な本性が明らかになったこの事件のあと、ふたたび彼は「勇気ある詩人」として演壇に立ち「物静かに警告を発する」道を選び、「この世の中でびくついている」者ではなせぬ体制批判を展開したのであり、自ら若者たちに範を示したといえよう。

そして同時にヴィーヒェルトが、この発言が自己の身を危険にさらす「冒険」であることを重々承知していたことは上記の訴えに続く言葉で明らかである。

これから2年の間に、またあなたがたに話することが許されるかどうか、私にはわかりません<sup>38)</sup>。

実際その通りになった。しかし2年というのも過少な見積もりだった。ヴィーヒェルトが再びミュンヘン大学講堂の演壇に立つまでに、それから10年もの年月を必要としたのである。



註

本稿は南山大学における日本独文学会秋季研究発表会（2000年10月7日）にて口頭発表した原稿に加筆修正したものである。

エルンスト・ヴィーヒェルトのテキストはすべて、Wiechert, Ernst: *Sämtliche Werke in zehn Bänden*. München 1957 (=SW.) に拠った。

なお、ギド・ライナーによってまとめられたヴィーヒェルトについての論評集というべき、

\*Reiner, Guido: *Ernst Wiechert im Dritten Reich; Eine Dokumentation; Ernst-Wiechert-Bibliographie 2.Teil*. Paris 1974

\*\*Reiner, Guido: *Ernst Wiechert im Urteil seiner Zeit; Literaturkritische Pressestimmen; Ernst-Wiechert-Bibliographie 3.Teil*. Paris 1976

以上2冊から引用したものについては、初出誌および初出紙を記したあと、続けて（ ）内にこの論評集の引用ページを記した。

- 1) その一例が『歳月と時代』の中のヴィーヒェルトが最後に生家を訪問した年の誤記である。正確には1936年なのだが、1935年のこととなっている（Wiechert: *Jahre und Zeiten*. SW. 9, S. 660）。ギド・ライナーもこの誤記については、作家としてなんらかの事実を隠蔽していることがあるかもしれないと疑問を呈している。

Vgl. Reiner, Guido: *Ernst Wiechert im Dritten Reich*, S.87, Fussnote 2.

- 2) 1929年、『カペルナウムの大尉』（*Der Hauptmann von Kapernaum*）で国際短篇小説賞（*der internationale Novellepreis*）、32年9月、『ユルゲン・ドスコチルの女中』でラーベ賞、同年10月、『イエーダーマン、ある名もなき者の物語』（*Jedermann, Geschichte eines Namenlosen*）でシュエネマン賞（*Schünemann-Preis*）と続けて受賞している。
- 3) Hamm, F: *Euckenband - Ernst Wiechert spricht*. In: *Völkischer Beobachter*, Nr. 69, 10. 3. 1933  
(\*Reiner: *Ernst Wiechert im dritten Reich*, S. 51).
- 4) *ibid.*, S.50.
- 5) Wiechert: *Jahre und Zeiten*. SW. 9, S. 649.
- 6) *Ebenda*.
- 7) Wiechert: *Der Dichter und die Jugend*. SW. 10, S. 362.
- 8) SW. 10, S. 364.
- 9) SW. 10, S. 364f.
- 10) *Eine Hamburger Zeitung*, 19. 8. 1933  
(\*\*Reiner: *Ernst Wiechert im Urteil seiner Zeit*, S. 29f.)
- 11) Krenzlin, Leonore: *Autobiografie als Standortbestimmung; Ernst Wiecherts "Wälder und Menschen" im Kontext der Entstehungszeit*. In: *Zuspruch und Tröstung; Beiträge über Ernst Wiechert und sein Werk*. Hrsg. von Hans-Martin Presske und Klaus Weigelt. Frankfurt am Main 1999, S. 140.
- 12) *Berlingske Aften* (Dänemark, Übersetzung), 6. 12. 1933.  
(\*\*Reiner: *Ernst Wiechert im Urteil seiner Zeit*, S. 31.)
- 13) *Berlingske Tidende* (Dänemark, Übersetzung), 6. 12. 1933.  
(\*\*Reiner: *Ernst Wiechert im Urteil seiner Zeit*, S. 32.)
- 14) *Berlingske Aften* (Dänemark, Übersetzung), 6. 12. 1933.  
(\*\*Reiner: *Ernst Wiechert im Urteil seiner Zeit*, S. 31f.)
- 15) Reiner: *Ernst Wiechert im dritten Reich*, S. 81.
- 16) *Extrabladet* (Dänemark, Übersetzung), 6. 12. 1933, Nr 249.  
(\*Reiner: *Ernst Wiechert im dritten Reich*, S. 81.)

- 17) Oberhessische Presse, 15. 1. 1934, S. 5.  
(\*Reiner: Ernst Wiechert im Urteil seiner Zeit, S. 35.)
- 18) Reiner: Ernst Wiechert im dritten Reich, S. 5.
- 19) 拙稿「教育者ヴィーヒェルト」(『工学院大学共通課程研究論叢』第32号, 工学院大学共通課程, 平成6年)を参照されたい。
- 20) Briegleb, Klaus: Ernst Wiechert. In: Lexikon der deutschsprachigen Gegenwartsliteratur, begründet von Hermann Kunisch, fortgeführt von Herbert Wiesner, ergänzt und erweitert von Sibylle Cramer, 2. Aufl. München 1987, S. 610.
- 21) Kindlers Literaturgeschichte der Gegenwart; die deutschsprachige Sachliteratur; Hrsg. von Rudolf Radler, München 1978, S. 43.
- 22) 複数のドイツ文学史書を見ても, 「移住」(Übersiedlung), 「亡命」(Emigration)と記述が分かれている。いずれにせよ, ヴィーヒェルトがドイツを去った経緯については複雑な事情があったことが窺える。
- 23) ヴィーヒェルトは, 1938年5月6日に「その反国家的思想ならびに国家に対する社会不安の煽動」のかどで逮捕され, ミュンヘンの刑務所に2ヶ月間拘留されたのち, 7月4日ヴァイマル近郊のブーフエンヴァルト (Buchenwald) 強制収容所に送られた。ここで過酷な労役を課され, 約2ヶ月後の8月30日に釈放された。この間の体験は「ある報告」(Ein Bericht)という副題がついた『死者の森』(Der Totenwald, 執筆1939, 発表1945)に詳しい。
- 24) Reiner: Ernst Wiechert im dritten Reich, S. 26f.
- 25) Vgl. Wiechert: Jahre und Zeiten. SW. 9, S. 452.
- 26) Reiner: Ernst Wiechert im dritten Reich, S. 27.
- 27) ibd., S. 54.
- 28) レーム事件のことを扱った日本語の書物には「長いナイフの夜」「長剣の夜」などと訳されているが, ここでは原語にこだわって訳出した。
- 29) Wiechert: Jahre und Zeiten. SW. 9, S. 654.
- 30) Vgl. Reiner: Ernst Wiechert im dritten Reich, S. 91f.
- 31) Brief an Friedrich Tucholski am. 28. 12. 1936.  
(\*Reiner: Ernst Wiechert im dritten Reich, S. 87.)
- 32) Reiner: Ernst Wiechert im dritten Reich, S. 62.
- 33) ibd., S. 64.
- 34) ibd., S. 63.
- 35) Wiechert: Der Dichter und seine Zeit. SW. 10, S. 380.
- 36) 溝辺敬一「注と解説」(溝辺敬一・長橋芙美子『Für das andere Deutschland——もうひとつのドイツをもとめて』, 芸林書房, 昭和50年)29頁。
- 37) Wiechert: Jahre und Zeiten. SW. 9, S. 654f.
- 38) Wiechert: Der Dichter und seine Zeit. SW. 10, S. 380.

(本学非常勤講師)